

つゆじも

斎藤茂吉

青空文庫

大正七年

大正八年

大正七年漫吟

齋藤茂吉送別歌会

大正六年十二月二十五日東京青山茂吉宅に於て

わが住める家のいらかのしろしも白霜を見ずて行かむ日近づきにけり

長崎著任後折にふれたる

うつり来しいへの畳のほひさへ心がなしく起臥おきふしにけり

据風呂すゑふろを買ひに行きつつこよひまた買はず帰り来て寂しく眠る

東京にのこし来しをさなごの茂太しげたもおほきくなりにつらむか

かりずみのねむりは浅くさめしかば外面とのもの道に雨降あめふりをるかな

聖福寺しやうふくじの鐘の音ちかしかさなれる家の藁いらかを越えつつ聞こゆ

ゆふぐれて浦上村うらかみむらをわが来ればかはす鳴くなり谷に満ちつつ

電灯にむれとべる羽蟻はありおのづから羽はねをおとして畳たたみをありく

うなじたれて道いそぎつつこよひごろ螢を買ひにゆかむとおもへり

灰いろの海うみどり鳥たなかむれし田中たなかには朝日のひかりすがしくさせり

とほく来てひとり寂さびしむに長崎の山のたかむらに日はあたり居り

陸みちのく奥おくに友は死につつままたきのひまもとどまらぬ日の光かなや

われつひに和のどに生きざらむとおもへども何なににこのごろ友つきつきに死す

おもかげに立ちくる友を悲しめりせまき湯あみどに目をつむりつつ

かりずみの家に起きふしをりふしの妻のほしいまをわれは寂しむ

うつしみはつひに悲しとおもへども迫せまり来くひとのいのちの悲しさ

むし暑き家のとのもに降る雨のひびきの鋭するとさわれやつかれし

長崎の石だたみ道いつしかも日のいろ強く夏さにけり

仮住かりずみの家の二階にひとりゐるわがまぢかくに蚊は飛びそめぬ

わが家の石垣いしがきに生ふる虎耳草ゆきのしたその葉かげより蚊は出でにけり

すぢ向ひの家に大工だいくの夜よしごと為事の長崎訛なごきくはさびしも

長崎歌会

大正七年十一月十一日於齋藤茂吉宅 題「夜」

はやり風かぜをおそれいましてしぐれ来しあさよ浅夜の床に一人寝にけり

大正八年雜詠

奉迎摂政宮殿下歌 長崎日日新聞所載

豊とよさか栄かといや新らしくなり成れる国見くにみをせずといでましたまふ

かけまくもあやにかしこし年ふ古れる長崎のうみに御艦みふねはてたまふ

百千代ももちよと祝ほぎてとどろく大砲おほづつに応こたへとよもす春の群むら山やま

み民等の祝ほぎて呼ぶこゑとりよろみなとふ港あめの天にとほらざらめや

友に与ふ

(長崎日日新聞、十首中存四首)

港をよろふ山の若葉わかばに光さしあはれ静かなるこのゆく春や

長崎は石だたみ道ヴエネチアの古ふるりし小路こうぢのごとどこそ聞け

おのづからきこゆる音ねの清すがしさよ春の山よりながれくる水

はりつめて事に従はむと思へどもあはれこのごろは痛いた々いたしかり

よわよわと幽こもりかなりともはからひの濁にごりあらすなわれの世過よすぎに

八月三十日

(長崎日日新聞)

長崎同人小集を土橋青村宅に開く

こほろぎの鳴けるひと夜の歌がたり乱みだれたる心しましなごみぬ

長崎に来てよりあはれなる歌なきをわれにな問ひそ寂しきものを

九月二日 日ごろ独りゐるを寂しむ

白たへのさるすべりの花散りをりて仏ほとけの寺てらの日の光はや

中町の天主堂てんしゆだうの鐘ちかく聞き二たびの夏過ぎむとすらし

九月十日 皓台寺

ヘンドリック・ドウフの妻は長崎の婦にてすなはち道富丈吉生みき

九月十日 天主堂

浦上天主堂 無二元罪サンタマリアの殿堂あるひは単純に御堂とぞいふ

外国よりわたり来れる霊父らも「昼夜勤勞」ここにみまかりぬ

九月十二日

独逸潜航艇を觀る。縣廳小使云、「潜航艇は唐人の靴のごとある」。夕べ新地の四海楼を訪ふ

長崎の港の岸に浮かばしめしドイツせんかうてい潜航艇いにわれ出入りつ

四海楼に陳ちんぎよく玉とといふをとめ居りよくよく今日も見つつかへり来く

九月二十五日 古賀、武藤二氏とともに猶ジナゴーク太殿堂を訪ふ。猶太新年なり

猶ユダヤ太紀元五千六百八〇年その新しんねん年のけふに会あへりき

満州よりここに來れる若わか者ものは叫びて泣くも卓たくにすがりて

長崎の商しやうにん人としてゐるLessner《レスナー》もCohn《コーン》も耀かがやく法ほふ服ふくを著きつ

十月二十五日

平戸行。平戸丸や旅館。小国李花に会ふ。崎方町阿蘭陀塀、阿蘭井戸、亀甲城
址、亀岡神社等

阿蘭陀おらんた あきびとの商人たちは自らの生業なりはひのためにこれを遺のこしき

あはれなる物ものがたり 語さへありけむを人は過ぎつつよすがだになし

われは見つ肥前平戸ひぜんひらとの年ふりし神楽かぐらの舞まひを海わたり来て

十月 東京大相撲来る。釈迦嶽九州山長興山秀の山出羽嶽等に会ふ

巡業でんごうに来る出羽嶽でんごうわが家にチャンポン食くひぬ不足ふそくもいはず

十月三十日 夜古賀十二郎氏の「長崎美術史」の講演を聞く

南蛮絵の渡来も花^{くわ}粉^{ふん}の飛びてくる趣^{おもむき}なしていつしかにあり

十月三十日

光源寺にて曉烏敏師の説教を聴き、のち鳴滝シイボルト遺跡を訪ふ

この^{あと}址^{あと}にいろいろの樹あり竹^{ちく}林^{りん}に冬の蠅の飛ぶ音のする

十一月六日

司馬江漢画を観る、「天明戊申冬日於崎陽梧真寺謹写司馬峻」

江漢かうかんが此処に來りて心こめし色をし見なむ 雲中うんちゆうくわんのんづ觀音図

十二月二十八日 渡邊與茂平と聖福寺を訪ふ

隱元いんげんの八十一歳の筆ふでといふ老いし聖ひじりの面おもしおもほゆ

十二月三十日

十一月なかば妻、茂太を伴ひて東京より來る。今夕二人と共に大浦長崎ホテルを訪ふ

よんさいの 茂太をつれて 大浦の洋食くひに 今宵は来たり

はやり風はげしくなりし長崎の夜寒をわが子外に行かしめず

寒き雨まれまれに降りはやりかぜ衰へぬ長崎の年暮れむとす

大正九年

一月六日

東京より弟西洋来る。妻・茂太等と共に大浦なる長崎ホテルにて晚餐を共にせりしが、予夜半より発熱、臥床をつづく

はやりかぜ 一年 おそれ過ぎ来しが吾は臥りて現ともなし

二月某日 臥床。私立孤児院は我家の向隣なり

朝な朝な 正信 偈よむ 稚児ら親あらなくにこゑ樂しかり

わが病やうやく癒えて心に染む朝の経よむ 稚等のこゑ

対岸の造船所より聞こえる鉄の響は遠あらしのごとし

鉄を打つ音 遠暴風のごとくにてこよひまた聞く夜のふくるまで

三月一日 連日勤務す

東京より来にしをさなご夕ごとに吾をむかへてこゑを挙ぐるも

五月四日 大光寺にて三浦達雄一周忌歌会を催す

長崎のしづかなるみ寺に我ぞ来し墓が鳴けるかな外の池にて

外のもにて魚が跳ねたり時のまの魚跳ねし音寂しかりけれ

藤浪の花は長しと君はいふ夜の色いよよ深くなりつつ

君死にしよりまる一年になるといふ五月はじめに君死にしかも

このみ寺は山ゆるぎ夜やしづかなる林の中に鶯啼きにけり

山のみ寺のゆふぐれ見ればはつはつに水銀いろの港見えつも

このみ寺より目したに見ゆる唐寺の門の藁も暮れゆかむとす

五月二十四日

大槻如電翁を迎へ瓊林館にて食を共にす。会者古賀十二郎、武藤長蔵、永山時英、奥田啓市の諸氏及び予

シイボルトを中^{ちゆうしん}心とせるのみならずなほ洋^{やうがく}学の源^{みなもと}とほし

五月二十五日 ひとり西坂をゆく

西坂^{にしぎか}を伴^{ばてれん}天連^{ふじやう}不浄^ちの地といひて言^{いひつ}継ぎにけり悲しくもあるか

短冊二種

おもほえず長崎に来て豊ゆたけき君がこころしに親したしみにけり

(永山図書館長に)

長崎のいにしふる古ごとと明あきらむる君ぞたふときあはれたふとき

(古賀十二郎翁に)

「慶長十年にはじめて南蛮より種をつたへて長崎桜馬場にこれをうゆる」(近代世
事談、金糸烟、烟草)

ささやけきくすりぐさ薬草の一つとおもへども烟草たばこのみしよりすでに幾いくとせ

武藤長蔵教授より大阪天主公教会の公教会月報を借覧しぬ

大音寺だいおんじの樟くすの太樹ふとしきを見てかへり公教会こうけうくわいはう報ほうの歌を写すも

五月三十日 雷が丘、雨声楼（秋帆別邸）辰巳にて夕餐会等を催す

萱草くわんざうの花さくころとなりし庭なつかしみつつ吾等つどひぬ

六月一日

ひとり西坂に行く。石塔「南無妙法蓮華経安永五丙申歳四月廿八日」石標「天
下之死刑場ノ馬込千人埋タル法塔様誰方モ参り被下度」 「長崎市東中町中島ノ
イ建」

長崎の麦むぎの秋あきなるくもり日にわれひとりこそそころ安やすけれ

六月二日 西浦上伊木いきりき力りきに到る

畠より烟がしろく立てる見ゆ麦刈る秋となりにけるかも

六月二十五日

六月はじめ小咯血あり、はかばかしからねば今日県立病院に入院す。西二病棟
七号室なり。菅沼教授来診

病^{やまひ}ある人いくたりかこの室^{へや}を出入^{いでい}りにけむ壁は厚しも

ゆふされば蚊のむらがりて鳴くこゑす病むしはぶきの声も聞こゆる

闇深きに蟋^{こほろぎ}蟀^{せむぎ}鳴けり聞き居れど病^{やみびと}人吾は心しづかにあらな

六月二十七日

血いづ。腎結核にて入院中の大久保仁男来りて予の病を問ふ

わが心あらしの和^なぎたらむがごとし寢^{ふしど}所に居りて水飲みにけり

くらやみに向ひてわれは目を開きぬ限^{かぎり}もあらぬものの寂^{しづ}けさ

若き友ひとり傍かたはらに来つつ居りこの友もつひに病やまひを持てり

七月二日 県立病院を退院す。三日より自宅に臥床して治療を専らにす

あらくさの繁しげれる見ればいけるがに地息ぢいきのぼりて青き香ぞする

午ひるすぎごろわが病室の入口うづらに鶉うづらの卵売りに来りぬ

ゆふぐれの泰たい山さん木ぼくの白しろ花はなはわれのなげきをおほふがごとし

七月二十二日 高谷寛日々来りてクロームカルシウムの注射せり

わが家の狭なかにき中庭にはを照らしつつかぎり行く光を愛かなしみにけり

ひと坪^{つぼ}ほどの中庭^{なかにわ}のせまきにもいのち鬩^{たたか}ふ昆^{こんちゆう}虫^{むし}が居り

年わかき内科医君^{きみ}は日ごと来てわが静^{じやうみやく}脈^{くすり}に薬入れゆく

長崎^{よとせ}に來りて四年の夏ふけむ白さるすべり咲^{いまだ}くは未か

七月二十四日 島木赤彦はるばる來りて予の病を問ふ

長崎の暑き日に君は來りたり涙しながるわがまなこより

よしゑやしつひの命^{いのち}と過ぎむとも友のこころを空^{むな}しからしむな

温泉嶽療養

大正九年七月二十六日、島木赤彦、土橋青村二君と共に温泉嶽にのぼり、よろづ屋にやどる。予の病を治せむがためなり。二十七日赤彦かへる。二十八日青村かへる。

この道は山峡やまがひふかく入りゆけど吾われはここにて歩あゆみとどめつ

この道に立ちてぞおもふ赤彦ははや山越やまじしになりにつらむか

赤彦はいづく行くらむただひとりこの山道やまみちをおりて行きしが

草むらのかなしき花よわれ病みし生いのちやしなふ山の草むら

みちのくに稚いとけなくしてかなしみし釣鐘草つりがねさうの花を摘みたり

うつせみの命いのちを愛をしみ地響ちひびきて湯いづる山にわれは来にけり

温泉うんぜんにのぼり来りきたて吾は居り常つねなきかなや 雲くもひかり 光ひかりさへ

温泉うんぜんのむらを離れてほのぐらたにき谿なかの中なかにて水みづの音とぞする

谿たにふかくくだる道見ゆあまつ日の照ることもなき谿たににかあらむ

千々ちぢわ和なだ灘なだにむかひて低いくく幾だにつ谷息ひきづくごとし山のうねりは

高たか々だかと山のうへより目守まもるとき天草あまくさの灘なだ雲とぢにけり

七月二十八日

きぞの朝友あさの行きたるこの道に日は当り居り見つつ恋こほしむ

家いでて来にしたひらに青^{あを}膚^{はだ}の温^{うん}泉^{ぜん}嶽^{だけ}の道見ゆるかな

小^こ鳥^{とり}らのいかに睦^{むつ}みてありぬべき夏^{なつ}青^{あを}山^{やま}に我はちかづく

山の根の木立^{こだち}くろくして静^{しづ}けきを家いで来つつ恋^こふることあり

羊^し齒^だのしげり吾をめぐりてありしかば寒^{ひぐらし}蟬^しひとつ近くに鳴きつ

たまたまは咳^{しは}の音^ねきこえつつ山の深^{ふか}きに木^きこる人あり

臥^ふ処^{しと}にて身を寂^{さび}しみしわれに見ゆ山の背^せ並^{なみ}のうねりてゆくが

あそぶごと雲のうごける夕まぐれ近^{くら}やま暗^{とほ}く遠^{とほ}やま明^{あか}し

夏^{なつ}の日の牧^{まき}の高^{たか}原^{はら}しづまりて温^{うん}泉^{ぜん}の山^{やま}暮^{くれ}れゆくを見たり

遠風とほかせのいまだ聞こゆる高原たかはらに夕さりくれば馬むれにけり

水みづひかり光ひかりななめにぞなる高原に群れたる馬ぞ走ることなき

七月二十九日 広河原道其他、前田徳八郎、高谷寛のぼり来

松かぜの音は遠くに近くにも聞こえくるころ吾は行くなり

合ねむ歡はなの花はなひくく匂におひてありたるを手たを折らむとする心こころ利どもなし

あまつ日は既にのぼりて向山むかやまに晩蟬ひぐらし鳴けどここには鳴かず

行きずりの道のべにして茱萸ぐみの実みははつかに紅あかし紅極あはきまらなむ

赤土あかつちの道より黒土くろつちの坂となり往くも反かへるも心にぞ留とむ

七月三十日

湯いづる山の月の光は隈なくて枕べにおきししろがねの時計とけいを照らす

長崎に二ふた年とせ居りて聞かざりし暁あかつきがたの蟬せみのもろごゑ

まくらべに時計とけいと手帳てちやう置きたるにいまだ射さしくるあけがたの月

起きいでて暈うのうへに立ちにけりはるかに月は傾かたむきにつつ

山の上にひととときに鳴くあかときの寒ひぐらし蟬せみ聞けば蟋蟀こほろぎに似たり

あかつきのさ霧きりに濡れてかすかなる虫むし捕とぐさの咲けるこのやま

寂しさに堪ふる寢所に明暮れし吾にせまりて青き山々

七月三十日、三十一日 別所奥、林中

温泉の別所の奥は遠く来し西洋人もまじりて住めり

木もれ日はしめれる土のひとところ微かなる虫の遊ばむとする

谿水のながるる音も巖かげになりて聞こえぬこのひと時を

牛ふたつ林のなかに来り居りきのふも此処に來りてあしか

あまつ日はからくれなるに山に落つその麓なる海は見えぬに

露西亜ろしあよりのがれ来れる童子わらべらもはぎまの滝に水あみにけり

八月一日 一切経滝等

幾重いくへなる山のはぎまに滝のあり切支丹きりしたんしゅう宗の歴史を持ちて

深き峽南かみなみひらきておち激たぎつ滝のゆくへを吾はおもひき

この山に湧きいだしたる幾いくいづみ泉あひ寄り峽かひの底そこひに落おちたぎ激つ

安息やすらひをおもひて心みだれざりふもとの山に紅あかき日ひかたむく

落つる日の夕かがやきはこの山の平たひらに居りてしばしだに見む

八月二日

あかつきはいまだ暗きにこの山にむらがりて鳴く蝸ひぐらしのこゑ

たぎり湧く湯のとどろきを聞きながらこの石原いしはらに一日ひとひすぐしぬ

温泉うんぜんが嶽たけに十日とをかこもれど我が咽のどのすがすがしからぬを一人ひとりさびしむ

水激みづたぎちけむ因縁よすがも知らずあしびきの山の奥より石原の見ゆ

ひぐらしは山の奥がに鳴き居りて近くは鳴かず日照ひてる近山ちかやま

かなかなの山ごもり鳴くは蟋蟀せせりのあはれに似たりひとり聞くととき

八月三日 谿

けふもまた山やまいづみ泉いづみなる砂のべに居をるかな病める咽のどを愛をしみて

谿のうへの樹を吹く風は強くしてわが居る石のほとりしづけし

雨はれし後の谿たにみづ水みづいたいたしきのふも今日けふもあか緒あかく色づき走る

この山に鴉こがらすすくなしゆふぐれて小鴉こがらす一つ地つちにおりたつ

山かげの檜ならの木原きはらの下枝しづえにも山蚕やまこが居りて鳥知らざらむ

大き石むらがる谿の水のべに心しづかになりにけるかも

八月三日 広河原道

わがあゆむ山の細道ほそちに片かたよりに薊あざみしげれば小林をばやしなすも

山なみの此処にあひ迫る深谿を見おろすときに心落ちゐず

しばしして吾が立向ふ温泉の妙見が嶽の雲のかがやき

長崎をふりさけむとするベンチには露西亜文字など人名きざめり

多良嶽とあひむかふとき温泉の秋立つ山にころもひるがへる

吾が憩ふひとついただきに漆の木いまだ小さく人かへりみず

めぐりつつ岨をし来れば島山と天草の海ひらけたり見ゆ

なぎさには白浪の寄るところ見えこの高きより見らくしよしも

ものなべて秋にしむかふひろがはら 広河原の水のほとりに馬居り走らず

山かげに今日も聞ければひぐらし 晚蟬はあきこほろぎ 秋蟋蟀の寂しさに似つ

やまかがし草に入りゆくに足とどむひたひ 額の汗を拭あせきつつ吾は

八月四日 谿、温泉神社（おしめんさま 四面宮、くにたま 国魂神社）裏の石原に沈黙せり

石原に來りもだ 黙せばわがいのち 生石のうへ過ぎし雲のかけにひとし

小さなるぼった のたぐひ跳はねゆきぬみづか 水涸れをりて白き石はら

曼珠沙華まんじゆしやげ 咲くはくべくなりて石原へこ おり來む道のほとりに咲きぬ

けふひとひ 一日雲のうごきのありありて石原いしはら のうへに眩暈めまひをおぼゆ

音たてて硫黄いわうふきいづるところより近き木立こだちに山蚕やまこあるなり

八月五日 広河原地、絹笠山

この山を吾あゆむとき長崎の真昼まひるの砲はうを聞きつつあはれ

絹笠きぬがさの峰みねちかくして長崎の真昼を告ぐる砲はうの音ときこゆ

ふか山のみづうみに来てぬばたまの黒き牛等うしらは水飲みにけり

山はらを貫つらぬきめぐる道ありて馬駈かけゆくがをりをりに見ゆ

山谿いくへが幾重の山の中なかこもり南の流みなみなここゆ出でむか

八月六日 晚景、谿

見おろして吾居る谿の石のべに没日の光さすところあり

理由もなきわが歩み谿底は既にくらきに水の音すも

わたつみに日は入りぬらむとおもほゆる夕映とほしこころにぞ染む

くらくなりし山を流るる深谿の水の音きけば絶えざるかなや

谿底を流るるみづは今ゆ後くらきを流れ音のかなしさ

わたつみの方を思ひて居たりしが暮れたる途に佇みにけり

闇空に羽鳴らして虫飛びゆけり峠につかれて我あゆむとき

夕映ゆふばえの赤きを見れば凡おほよそのものとしもなし山のうへにて

八月七日 谿谷

谷底たにぞこにくだり来にけり独ひとごとり言も今はいはなくに眼まなこをつむる

昼ひるちかきころほひならむと四五歩しごほゆき山やまたに谿まなこみづに眼まなこをあらふ

みづ越えてなほし行くときうづたかき落葉のほひその落葉はや

谷底たにぞこの石間いしまくぐりてゆく水うをすに魚住うをすみをりて見ゆるかなしき

この谿をおほへる樹きぎ々のしげり葉を照らす光よともしむわれは

青々と樹々の葉てらす天つ日はいま谷底の石をてらさず

かすかなる水のながれとおもへども夕さりくればその音さびし

石苔にわが出したる唾のべに來りて去らぬ羽虫あはれむ

この狭間を強き水激ち流れけむ石むらがりて横たふ見れば

苔あをく羊齒のしげれる石群を山ゆく水は常濡らしけり

石のひまくぐり流るる谷の水ききつつ吾は一日ここにゐる

みなかみにのぼりてゆけば水の道落葉が下に隠るひにけり

石のまゆ常湧きにして音たつるいづみの水をあはれ一人見つ

おのづから水ながれたる沢さはこ越えて青山あをやま見ゆるところまで来こし

しづかなる一日ひとひを経むと山水やまみづのながるる谿に吾は来にけり

山みづのながるる音の親したしさにわれは来りて言ことさへいはず

山道をゆけばなつかし真夏まなつさへ冷つめたき谷の道はなつかし

傾きつつ太木ふときしげれるきりぎしのその下したのべの水みづ光ひかり見む

みづ流ながるる谷底いでて木漏日こもればひの寂しき道を帰り来るなり

八月八日 林中、谿、山

けふもまたしづかに経むと夏山の青きがなかに入りつつぞ居る

しらじらと巖間を伝ふかすかなる水をあはれと思ひ居るかも

山みづの源どころの土踏める馬の蹄のあとも好きかも

石の上吹きくる風はつめたくて石のうへにて眠りもよほす

くだり来し谷際にして一時を白くちひさき太陽を見し

八月九日 観音堂

吾が憩ふ観音堂に楽書あり Wixon, Nicol, Spark 等の名よ

八月十日 谿、林

谷底を日は照らしたり谷そこにふかき落葉の朽ちし色はや

谷かげに今日も来にけり山みづのおのづからなる音をときこえつつ

魚の子はかすかなるものかものおそれしついづみみづつ泉の水なかにゐる

妙見めうけんへ雨乞あめごにのぼり来し人らこの谿のみづ口づけ飲めり

八月十一日

午前三時、高谷寛、大橋松平、前田徳八郎等普賢嶽にのぼりぬ。おのれ宿にのこりて、朝食ののち林中を歩く

向山むかやまのむら立つ杉生すぎふときをりに鴉つれの連の飛びゆくところ

おのづから夏ふけぬらし温泉うんぜんの山の蚕かふこまゆも繭まゆごもりして

八月十二日

久保（猪之吉）博士予を診察したまふ。また夫人より菓子を贈らる

ジュネーヴのアスカナシイの業績げふせきを語りたまひて和のどに日は暮る

この山に君は来りて昆虫こんちゆうの卵あつむと聞くが親したしさ

わが^{やまひ}病診^{まひ}たまひしかど朗^{ほが}らにていませばか吾の心は和^なぎぬ

温^{ゆのひら}平^{をんせん}の温泉の話もしたまひて君がねもごろ吾は忘れず

万^{よろづ}屋^やに吾を訪ひまし物^{ものがた}語るよりえ夫人^{ふじん}は長^{なが}塚^{つか}節^{たかし}のこと

長崎

八月十四日、温泉嶽を発ちて長崎に帰りぬ。病いまだ癒えず。十六日抜歯、日毎に歯科医にかよふ。十九日諏訪公園逍遙。温泉嶽にのぼりし日より煙草のむことを罷めき

長崎に帰り来りてむしばめるわが齒^とを除^いりぬ命^{いのち}を愛^をしみ

暑かりし日を寝処ふしどより起き来しが向ひの山は蒼あをく暮れむとす

公園の石いしの階かいより長崎の街まちを見にけりさるすべりのはな

温泉うんぜんより吾はかへりて暑き日を齒科医に通ふ心しづかに

八月二十五日 福濟寺

のぼり来し福濟ふくさい禪寺ぜんじの石だたみそよげる小草せくさとおのれ一人ひとりと

石のひまに生おひてかすかなる草のありわれ病みをれば心かなしゑ

長崎の午ひるの大砲たいはう中町なかつまちの天主堂てんしゆだうの鐘かねここの禪寺ぜんじの鐘

福濟寺にわれ居り見ればくれなるに街の処々ところどころに百日紅さるすべりのはな

八月二十六日 仰臥

ものなべて過ぎゆかむもの現身うつしみはしづかに生きてありなむ吾われよ

みづからの此身このみよあはれしひたぐるつひことなく終ひの日ひにも許ゆるさな

しづかなる吾の臥処ふしどにうす青き草かげろふは飛びて来にけり

八月二十七日 仰臥 二十八日 仰臥、長崎精靈ながし

精靈しやうりやうをながす日来り港には人みちをれどわれは臥ふし居をり

八月二十九日 北海道なる次兄より長女富子の写真をおくりこしければ

たらちねの母の乳房ちぶさにすがりゐる富子とみこをみれば心なは和なぎぬ

山あたかく河おほ大ほいなる国原あに生れしをさなごことほぐわれは

とほくゐて汝ながうつしゑを見るときは心をどらむほども嬉なしゑ

唐津浜

八月三十日

午前八時十五分長崎発、午後一時三十五分久保田発、午後三時十五分唐津著、
木村屋旅館投宿。高谷寛共に行きぬ

五日あまり物をいはなく鉛筆をもちて書きつつ旅行くわれは
肥前なる唐津の浜にやどりして唾おとしのごとくに明暮あけくれむとす

八月三十一日 木村屋旅館滞在

海のべの唐津からつのやどりしばしばも噛みあつる飯いひの砂すなのかなしさ

潮鳴うしほなり夜もすがら聞きて目ざむれば果敢はかなきがごとしわが明日あすさへや

城址しろあとにのぼり来りて蹲しゃがむとき石垣いしがきにてる月のかげの明あかるさ

九月一日 為刑死靈菩提、享保二丁酉歳九月十七日

砂浜すなはまに古りて刑死けいしの墓かぶのありいかなる深き罪つみとなりにし

満島みちしまにわたりて遊ぶ人等ひとらゆく月に照らされ吾等われらもい往ゆく

九月三日 終日沙浜沈黙

日もすがら砂原すなはらに来て黙せりもだき海風うみかぜつよく我身わがみに吹くも

九月四日 沙浜

飯いひの中にまじれる砂すなを氣きにしつつ海辺うみべの宿やどに明暮あけくれにけり

はるかなる独りひと旅路たびぢの果てにして壱岐いきの夜寒よさむに曾良そらは死にけり

命いのちはてしひとり旅あはこそ哀げんろくれなれ元禄よの代そらの曾良そらの旅路あはは

朝鮮に近く果てたる曾良の身の悲しきかなや独りしおもへば

朝あさのなきさに眼まなこつむりてやはらかき天あまつ光ひかりに照らされにけり

この病癒やまひえしめたまへ朝日子あさひこの光よ赤く照らす光よ

唐津の浜に居りつつ城跡しろあとの年ふりし樹きを幾たびか見む

砂浜すなはまにしづまり居れば海を吹く風ひむがしになりにけるかも

孤独こどくなるものごとくに目のまへの日に照らされし砂すなに蠅居はへり

日の入りし雲をうつせる西の海はあかがねいろにかがやきにけり

九月五日 高谷寛と満島にわたる

松浦河月あかくして人の世のかなしみさへも隠さふべしや
まつらがは

九月六日 男ひとり芸妓ふたり

隣りに男女の語らふをあな嫉ましと言ひてはならず
とな ま ををみな

九月八日 沙浜

いつくしく虹たちにけりあはれあはれ戯れのごとくおもほゆるかも
にじ

日を継ぎてわれの病をおもへれば浜のまさごも生なからめや
やまひ

わがまへの砂をほりつつ蜘蛛はこぶ蜂のおこなひ見らくしかなし
くも

わたつみを吹きしく風はいたいたしいづべの山にふたたび入らむ

九月十日 高谷寛と来しかたあひ語りて

わが友はわが枕べにすわり居り訣わかれむとして涙なみだをおとす

九月十一日

午前九時五十六分唐津発、十二時半佐賀駅にて高谷寛と訣ををしむ。軌道、人力車に乗り、ゆふぐれ小城郡古湯温泉に著きぬ

ねもごろに吾われの病やまひを看護みとりしてここの海べに幾夜か寝つる

わがためにここまで附きて離れざる君をおもへば涙しながる

わたつみの海を離れて山がはの源みなもとのぼりわれ行かむとす

古湯温泉

九月十一日 佐賀県小城郡南山村古湯温泉扇屋に投宿、十月三日に至る

うつせみの病やまひやしなふ寂さびしさは川上かはかみ川がはのみなもとどころ

ほとほとにぬるき温泉いでのゆを浴あむるまも君みぎが情なさけを忘れておもへや

遠雲の遠きまにまに近雲の近きまにまにかりがねはあひ呼びわたれ羽おとさへ聞ゆ

るまでに

川きよき佐賀のあがたの川のべに吾はこもりて人に知らゆな

蝻かまきり螂が蜂を食くひをるいたましさはじめて見たり佐賀さがの山べに

日の光浴あみて川べの石に居り赤蜻蛉あかあきつ等ははやも飛びつつ

われひとりうらぶれ来れば山やま川がはの水の激たぎちも心にぞ沁む

この川の向ひの岸に白々と咲きそめたるは何の花ぞも

浅山あさやまをわれはわたりて谷水たにみづの砂ながるるを今ぞ見てゐる

杉の樹に紅きあぶらの滲みづるををさなごの時のごとく愛しむ

曼珠沙華むらがり咲けりこの花の咲くべくなりて未だし籠る

山がはの石のほとりに身を寄せて日の光浴む病癒えむか

山がはの水の香のする時にしみじみとして秋風ふきぬ

黄櫨もみぢこの山本にさやかにて慌しくも秋は深まむ

いつしかに生れてゐたる蝗等はわが行くときに逃ぐる音たつ

風ひきて一日臥したりわが部屋のなげしわたらふ蛇ひとつ

この家に急に病みたる一人ありわれは手当す夜半過ぎしころ

旅とほき佐賀の山べの村むらまつ祭り相撲のきほひ吾は来て見つ

(二十一日松森神社)

秋さりし山といへども蒸暑く雲のほびこり低くなり来も

(二十三日雷雨)

東京に子規忌歌会のある日ぞとおもひて吾は川かはのべ辺往くも

(二十六日)

やうやくに秋のふかまむ山やまの峽朝かひの雷鳴りいかづちとどろけり

けふの昼雷ちらい鳴りし雲そきゆきて秋の夜の月のぼらむとする

けふもまた山に入り来て樹きの下もとに銀ぎんなん杏あんひろふ遊ぶがごとく

病みながら秋のはぎまに起臥おきふしてけふも嘔いひみたる飯いひの石いしあはれ

此処に来て蛇のあまたを見たりけり常日ごろ蛇をおそれてゐしが

親しかる心になりて此里のまだ金つかぬ栗の実を買ふ

烟草やめてより日を経たりしがけふの暁がた烟草のむ夢視つ

みづからの生愛しまむ日を経つつ川上がはに月照りにけり

秋づきて寂けき山の細川にまさご流れてやむときなしも

みづ清き川上がはに住む魚のエダを食したり昼のかれひに

胡桃の実まだやはらかき頃にしてわれの病は癒えゆくらむか

川のべに蜂むらがるを恐れつつ幾たび此処をとほり行きけむ

秋^{あき}水^{みづ}をわきて悲^{かな}しとおもはねど深^はき狭^{せま}間^まに見^みるべかりけり

向^{むか}山^{やま}に朝^あひかり差^さしそめしかば谷^やもあらはになり^{なり}にけるかも

早^わ稻^せの香^かはみぎりひだりにほのかにて小^せ城^ぎのこほりの道^{みち}をわれゆく

ゆくりなく見^みつつわがゐる青^あ栗^{くり}は近^{ちか}き電^{でん}灯^{とう}に照^てらされゐたり

曼^{まん}珠^{じゆ}沙^さ華^か咲^さきつづきたる川^かのべをわれ去^さりなむか病^{びやう}癒^いえつつ

小^を野^の五^ご平^{へい}翁^{おう}九^く十^{じゆ}一^{いち}歳^{さい}にて身^みまかりぬ気^き根^{こん}つめつつ長^{なが}命^{いき}したり

旅^{りょ}ゆきつつ勝^{しやう}負^ふをしたるつよき逸^{いつ}話^わこの翁^{おきな}にはめづらしからず

山口好を悼む 十月十七日大牟田浄心院追悼歌会のために送る

君死せりとふしらせを我は山深く狭間はざまに居りて聞けるさびしき

ありし日を思ひいでなむ世の相すがたの悲しき歌を君はうたひし

きびしかりし労働らうどうの歌うたいくつかが人の心にかがやかむかも

長崎

十月三日 朝古湯をたち午後長崎にかへる。万物に無沙汰の感ふかし

長崎にかへり来りて友を見つ遠とほのめづらの心かなしも

校長にも会ひに行きたりおのづから低きこゑにて病やまひを語る

われ病みて旅に起臥おきふしありしかば諏訪すはの祭まつりにけふ逢ひにける

心しづめて部屋にし居れば衢ちまたより神の祭りの笛ふえの音ねきこゆ

わが部屋に書ふみを重ねて旅行ふみきしが書ふみを持てれば手の痕あとつくも

十月九日 中村三郎氏と共に諏訪神社うへの丘にのぼる。 諏訪祭第二日

長崎の港見おろすこの岡に君も病めれば息いきづきのぼる

六枚板

十月十一日

西彼杵郡西浦上木場郷六枚板の金湯にいたる。浴泉静養せむためなり

浦上うらかみの奥に来にけりはざまより流れ来る川をあはれに思おもひて

クルスある墓を見ながら通とほり来し浦上うらかみ道を何時かかへりみむ

日もすがら朽葉くちばの香かする湯をあみて心しづめむ自みづからのため

儂麻質リユーマチス斯病おうなみをる媪等まじにあひ交り日ねもす多く言ふこともなし

朝な朝な同じ頃あひに稲田いなた道みち児らは走りて学校へ行く

道のべに赤棟やまかがし蛇多なきをおどろきつつ西浦上にしうらかみをもとほりて来くも

山のべにひそむがごとき切支丹の貧しき村もわれは見たりき

かかる墓もあはれなりけり「ドミニカ柿本スギ之墓行年九歳」

「ドナメ松下ヒサ墓行年九十二歳」信者にて世を終へしものなり

信徒のため宝盒抄略といふ書物御堂の中にぼつりとありぬ

小さな御堂にのぼり散在する信者の家を見つつしゐたり

この宿に島原ゆ来し少女居りわがために夕べ洋灯を運ぶ

油煙たつランプともして山家集を吾は読み居り物音たえつ

この家の主人あるじわざわざ長崎に買ひたる刺身さしみを吾に食はしむ

ここ越えてゆかば長崎の西山にしやまにいつるらむとて暫く歩しほらありく

ひらけたる谷にむかひて長崎の港のかたをおもひつつ居り

小浜

十月十五日、六枚板発。少女予の荷を負ふ。午前十時四十分長与発、午後一時
小浜著、柳川屋旅館に投ず。学生立石源治静養に来居るに会ふ

朝なきな船の太笛ふとぶえ聞きしより山峡やまかひのこともわきて思はず

土手かげに二人来りて光浴む一人はわれの教ふる学生

霸王樹のくれなるの花海のべの光をうけて気を発し居り

砂浜に外人ひとりところがりて戯れ遊ぶ日本のをみな

塩はゆき温泉を浴みてこよひ寝む病癒むとおもふたまゆら

鷗等はためらひもなく今ぞ飛ぶ嫉くしおもふ現身われは

日本舟にひるがへりゐる旗見つつその伝承をかたみに語る

長崎の茂木の港にかよふ船ふとぶとと汽笛を吹きいだしたり

入りつ日の紅き光のゆらぐとき磯鴨のこゑもこそ聞け

日だまりにけふも来りぬ 行末ゆくすゑのことをおもはば悲しからむぞ

ここに来て落日いりひを見るを常つねとせり海の落日いりひも忘れざるべし

小浜をばまなる森芳泰もりよしやすき来わがための心づくしを永ながくおもはむ

温泉うんぜんの山のふもとの塩しほの湯ゆのたゆることなく吾たは讚たへむ

嬉野

十月二十日 小浜発、零時二十二分彼杵著、夕べ嬉野著

旅にして彼杵神社そのきじんじやの境内けいだいに遊樂相撲いうらくすまふ見ればたのしも

祐徳院いうとくぬいなり稲荷いなりにも吾等われらまうでたり遠くたひこ旅来りきしことを語りて

嬉野の旅のやどりに中林なかばやし 梧しごちく 竹翁たけおきなの手ふるひし書しよよ

この山を越えて進みし大隊だいたいが演習えんじゆやめて一夜ひとよ湯浴ゆよくみす

透きとほるいで湯の中にこもごもの思ひまつはりかぎ限りもなしも

この村の小さき社やしらの森もりに来て黙もだすことあれど心足らはず

わが病やまひやうやく癒えぬとおもふまで嬉野うれしのの山秋あきふけむとす

長崎

十月二十六日。午前八時四十分嬉野発、十時四十三分彼杵発、十二時半長崎著

十月二十八日 病院学校に勤務す

病院のわが部屋に来て水道すゐだうのあかく出で来るを寂さびしみゐたり

十一月一日

武藤長蔵教授より大浦天主堂に聖体降福式あることを知らせありしかど、身を
いたはりてまるらず

けふ一日腹ひとひをいたためて臥ふしをれば聖きよきまとゐに行きがてなくに

十一月五日

長尾寛濟十月八日東京にて没す行年四十、東京巢鴨真性寺に葬る。寛濟は予より長ずること一歳なりき

長崎に心しづめて居るときに永遠とはの悲かなしみ聞かむと思ひきや

浅草みすぢまちの三筋町なるおもひでもうたかたの如ごとや過かぎゆく光かげの如ごとや

十一月十四日 土屋文明氏と共に春徳寺を訪ふ

黄檗わうばくの傑すぐれし僧のおもかげをきのふも偲おもひけふもおもほゆ

赤く塗りし大^き木の魚^{うを}かかりある僧^{そう}等の飯^{はん}のときに打つべく

扁^{へん}額^{がく}に海^{かい}不^ふ揚^{やう}波^はの四^しつの文字^{もじ}おごそかにしも年^{ねん}ふりにける

シイボルト鳴滝校舎址

年々にほふうつつの秋草につゆじも降^ふりてさびにけるかも

石垣のほとりに居れば過ぎし世のことも偲^{おも}ばゆよみがへるはや

もろ人が此処^{こゝ}に競^{きほ}ひて学^{まな}びつるその時おもほゆ井戸^{ゐど}をし見れば

芭蕉葉もやうやく破^やれて秋ふけぬと思ふばかりに物ひそかなり

洋学の東漸ここに定まりて青年の徒はなべて競ひき

柿落葉色うつくしく散りしきぬ出島人等も来て愛でけむか

鳴滝の激ちの音を聞きつつぞ西洋の学に日々目ざめけむ

興福寺、深崇寺、書画帖

深崇寺に栗崎道喜の墓を訪ふ顕耀院道喜正元居士

祭も過ぎて照らす日の光しづかなる長崎の山いろづきにけり

十一月二十一日 土屋氏長崎を発つ。夜辰巳に会合あり

くれぐれの家に石露の黄の花はわれとひととを招ぐに似たり

十一月二十二日 平福百穂画伯と浦上村をゆく

浦上うらかみの女をんなつらなり荷を運ぶそのかけごゑは此処まで聞こゆ

白く光るクロスの立てる丘のうへ人ゆくときに大きく見えつ

浦上うらかみの女等をんなの生活ことな異りて西方のくにの歎なげきもぞする

長崎の人等もなべてクロス山と名づけていまに見つつ経たりき

斜はたなる畠はたの上にてはたらける浦上うらかみ人等びとのその鋏くはひかる

牛の背に畠はたつものをば負はしめぬ浦上うらかみ人は世の唄うたはず

黄櫨^{はげ}もみぢこきくれなるにならむとすクロス山より吹く夕^{ゆふべ}風^{かぜ}

十一月二十三日 百穂画伯と長崎図書館を訪ひ南蛮史料を看る

モリソン文庫明^{みやう}恵^{ゑしやう}上人^{にん}の歌集をば少しく読みて吾^{われ}ものおもふ

十一月二十四日 百穂画伯と街上を行く

西^シ比^ベ列^リ亜^アよりおくりこされし俘虜^{ふりよ}あまた町にむらがるきのふも今日も

大浦の道のほとりにルーヴルの紙幣を売ると俘虜は佇む

チエツコへ帰らむとする捕虜^{ほりよ}ひとり山の石かげに自殺をしたり

寺町の墓のほとりにもかたまりてチエツコの俘虜は時を費す

親したしかる友をむかへて身みの上うへのことも語りぬ夜のふくるまで

(平福氏)

長崎より

このとし秋より冬にかけ折にふれて作りたる歌、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞
に公にせり

真日あかく港の西に落ちゆきて今しみじみと夕映ゆふばえにけり

港より太笛ふとぶえ鳴れるひまさへや我が足もとに蟋蟀こほろぎのこゑ

みち足らはざる心もちて入日さす切支丹きりしたんざか坂をくだり来にけり

塩しほおひてひむがしの山こゆる牛まだ幾ほども行かざるを見し

山かげの大根の畑に日もすがら光あたるを見るはさびしも

港をよろふ山の棚たなはた畑たに人居りて今しがた昼ひるいひ飯いひを食ひたるらしき

雨はれし港はつひに水みづがね銀がねのしづかなるいろに夕ぐれにけり

友ふたり二人もつひに帰りぬはりつめし心ゆるみて水を飲むなり

支しなまち那街なまちのきたなき家に我の食ふ黒くろき皮びんたん卵たんもかりそめならず

夏の初めより病に罹り居りしかど癒いえて白霜しらしもの降りたるを見つ

(土屋氏・平福氏)

君がなりはひ業務いそがは忙いそがしからむ然れども張りつむる心まもを守り居らむか

長崎の港を見れば我がこころなご和みしづまるをあやしと思ふな

セミヨノフの砲艦はうかんひとつ泊はてるを背向そがひにしつつ我いそは急いそげり

病いえてここに来りぬ目のもとの落葉のしづかさを独ゆかむか

長崎にも霜ふりにけりありふれしものあはれと我いは思いはず

さむき雨長崎の山にも降りそそぐ冬もなかの最中もなかとなるにやあらむ

ものぐるひの被害ひがい妄想まうさうの心さへ悲いしきかなや冬ふゆになりつつ

ウンガルの俘虜ふりよむらがりて長崎の街まちを歩あくに赤いりく入日ひす

あはれとも君は見ざらむ寺まちの高き石垣いしがきにさむき雨かな

みちのくの仙台せんたいよりおくりくれしてふ納豆なつとうを食む心しづけさ

山さんじやう上の白き十字架クルスの見えそむる浦上道うらかみみちは霜どけにけり

豆もやしと氷豆腐を買ひ来つつ汁しるつくらむと心いそげり

長崎の港の岸をあゆみるるピナテールこそあはれなりしか

うらがなしき夕ゆふべなれどもピナテールが寝所ふしどおもひて心なごまむ

十二月五日

午前武藤長蔵教授、三上知治画伯と共に大浦天主堂を訪ひ、午後ピナテル
 (Pignatel) 翁を訪ひ

寢所ふしどには括くくりまぐら枕まくらのかたはらに朱しゆの筥はこまぐら枕まくら置きつつあはれ

冬の雨ふるけふをしも Pignatel 《ピナテル》が家をたづねて身にし染しむもの

年老いてただひとりなるピナテル寂しづかなるごとくなほも起おき臥ふす

歳晚

このやまひ癒いやしたまへと山川やまかはをゆきゆきし歳としの暮となりぬる

長崎を去る日やうやく近づけば小さな論文に心をこめつ

クリスマスみだうの長崎の御堂に入ることも二たびをせむ吾ならなくに

暮れの年妻ともに身をいたはりて筑紫のくにの旅ゆかむとす

歌会

土屋文明氏歓迎歌会 十一月十七日於茂吉宅、課題「坂」

ひむがしの峠を越ゆる牛ひとつ歩みしづかなるをわれは見にけり

(西山所見)

平福百穂氏歓迎歌会 十一月二十四日於長崎県立図書館、課題「港」

くもり日の港をいでてゆく船はかなしきかなやけむりあげつつ

大正十年

九州の旅

大正九年十二月三十日長崎発、熊本泊、翌三十一日熊本見物を終り、同夜人吉
林温泉泊。

大正十年一月一日、林温泉より鹿児島に至る。一泊

秀頼が五歳のときに書きし文字いまに残りてわれも崇むたふと

熊本のあがたより遠く見はるかす温泉うんぜんが嶽たけは凡ただならぬやま

光よりそともになれる温泉うんぜんの山腹にして雲ぞひそめる

球磨川くまがはの岸に群れるて遊べるはこの狭間はざまに生れし子等ぞうま

みぎには冬草ふゆくさいまだ青くして朝の球磨川ゆ霧たちのぼる

青々と水綿ゆらぐ川のべにわれはおりたつ冬といへども

一月いちぐわつの冬の真中もなかにくろぐろと蛸おたまじやくし 蛸はかたまるあはれ

白髪岳しらがだけ市房山いちふさもふりさけて薩摩さつまをかひを汽車は行くなり

大畑駅おこたよりループ線となり矢嶽やたけ越す隧道トンネルの中にてくだりとなりぬ

桜島は黒びかりしてそばだちぬ溶巖ようがんながれしあとはおそろし

鹿兒島の名所を人力車にて見てめぐり疲れてをりぬ妻と吾とは

わが友はここに居れどもあわただし使を君にやることもなし

城山にのぼり来りて劇しかりし戦のあとつぶさに聞きて去る

開聞かいもんのさやかに見ゆるこの朝け桜島のうへに雲かかりたる

大隅おほすみは山の秀ほつ国くに冬がれし山のいただき朝日さすなり

霧島は朝をすがしみおほどかに白雲かかるうごくがごとし

霧島はただに厳いづくしここにして南みなみ風かぜに晴れゆきしとき

一月二、三日 夜宮崎神田橋旅館、三日宮崎神宮参拜

宮崎の神の社にまゐり来てわれうなねつく妻もろともに

冬の雨いさごに降りてひろ前にあゆめるわれの靴の音すも

ねたましくそのこゑを聞く旅商人たびあきびとは行く先々さきざきに契をむすぶちぎり

一月三日

午後三時青島あをしまにつき、広瀬旅館投宿、第五高等学校教師ポーター（五十四歳）
滞在しゐる

打寄する浪は寂しく南なる樹々ぞ生ひたるかげふかきまで

暖き洋のながれのありてこそかかる繁りとなりにつらしも

旅館にはポーターといふ洋人もやどりて日本の酒をのむ見ゆ

青島の木立を見ればかなしかる南の洋のしげりおもほゆ

南より流れわたれる種子ひとつわが遠き代のことしぬばしむ

かすかなる光海よりのぼりくる日向のあかつきの国のいろはや

青島に一夜やどりてひむがしのくれなる見たりわが遠き代や

ひむがしは赤く染まりてわが覚むる日向の国のあかつきのいろ

わたつみの海につづける 茜あかねぞら 空ふたとぎ 一時ふたとぎにしてくもりに入りぬ

一月四日 帰途につく

霧島はおごそかにして高原たかばるの木原きはらを遠をちに雲ぞうごける

灰いろのくすしき色も日あたりてこの高山たかやまは見れども飽かず

あたらしき年のはじめを旅来たびこしが高千穂の峰に添ふごとかりき

青井岳あをみだけの駅出でてより猪いのししの床の話あをみだけを聴きつつ居たり

一月五日

久留米、「寛政五癸丑年六月二十七日、生国上州新田郡細谷村、高山彦九郎正之墓」。
上野旅館にてアララギ歌会。梅林寺を訪ふ

くるめ 久留米なる 遍照院へんぜうあんにわれまうづ 「松陰しょういん以白居易いはいくせい」のおくつき

神つ代こほのこと恋しみてしらぬひ筑紫つくしのくにに果てし君はも

夜もすがら歌を語りて飽かなくに朝あさどり鶏あかねが鳴く茜あかねさすらし

九州じふいちにんの十一人の友よりてわれと歌はげむ夜の明くるまで

ばいりんじ 梅林寺ばいりんじに紫海禅林むらさきかいぜんりんの扁額へんがくあり谷たにを持ちたるこの仏林ぶつりんよ

三三^{さんじやうけん}生軒^{こしつ} 居室^{こしつ}より見おろす谷まには僧一人来て松葉を掃くも

筑後川^{ひた}日田^{ひた}よりくだる白き帆も見ゆるおもむきの話をぞ聞く

一月六日 太宰府、観世音寺、都府楼址、武雄温泉

観世^{くわんぜおんじ}音寺^{とくふうろう}都府楼^{とくふうろう}のあともわれ見たり雑談^{ざつだん}をしてもとほりながら

長崎

一月三十一日

奥田氏送別会を栄家に開く。会者図書館談話会員、主賓のほか、永見徳太郎、増田廉吉、谷田定男、林源吉、大庭耀、水谷安嗣諸氏

くさぐさの事を思ひて尽きざるにこよひ吾等は互に酔ひつ

みなみ
南の国はゆたけし朝あけて君を照らさむ天つ日のいろ

二月三日

奥田啓市氏鹿児島県立図書館長として出発す。予さはりありて見おくり得ざり
しことを悔ゆ

このゆふべ悔いおもへども君とほく今し去りゆく悔いてかへらず

二月十日 述懐

長崎の港をよろふむら山に來向きむかふ春の光さしたり

ものぐるひはかなしきかなと思ふときそのものぐるひにも吾は訣わかれむ

長崎に來りて既にまる三年友のいくたり忘れがたかり

きびしかりしはやり風にて見近みぢかくの三みたりはつひに過すぎにけらずや

そがひなる山を越えゆく矢上やがみにも思おもひのこりてわれ発たむとす

三月十四日

雪大に降、諸家に暇乞にまはる。夜茂吉送別歌会を長崎図書館に開く

長崎をわれ去りなむとあかつきの暗くらきにさめて心さびしむ

長崎をわれ去りゆきて船ふなぶえ笛の長きこだまを人聞くらむか

白雪のみだれ降りつつ日は暮れて港の音も聞こえ来るかな

三月十五日 医学専門学校職員食堂のために一首をしたたむ

行ゆくはる春の港より鳴る船ふなぶえ笛の長きこだまをおもひ出でなむ

長崎を去り東上

三月十六日。午後十一時長崎を出発す。先輩知友多く見送らる。予長崎に居ること足掛五年、満三年三月なり。前田毅、江藤義成二君同車し、途上門司義夫君に会ふ

三月十七日

午前五時博多著、栄屋旅館。大学生青木義作、金子慎吾二君来る。榭、久保二教授を訪問し、耳鼻科教室精神病学教室を參觀す。夜久保博士夫妻と晚餐を共にす

もろびとに訣わかれれをつけて立ちしかど夜半よ過はぎて心耐へがてなくに

春さむしとおもはぬ部屋に長崎の御堂みだうの話長塚節たかしの話

あたたかき御心みこころこもるこの室へやにあまたの猫も飼はれて遊ぶ

三月十八日

午前九時四十二分博多発、十一時四十二分小倉著、市中を見物し、ついで延命寺に行き公園を逍遙、奇兵隊墓、名物おやき餅

春いまだ寒き小倉こくらをわれは行く鷗外先生おもひ出いだして

公園の赤土あかつちのいろ奇兵隊きへいたい戦死せんしの墓延命寺はかの春は海潮音かいてうおん

三月十八日

午後一時小倉発、午後四時四十二分別府著、別府には大正八年夏一たび来りき。
街見物、保養院長鳥潟博士訪問、博士は大学同窓也。大分共進会を見る

あたたかき海辺の街は 春しゅんぎく 菊きくを既に売りありく霞は遠し

鳥の音も海にしば鳴く 港みなとまち 町湯まちゆいづる町を二たび過ぎつ

三月二十日。午後二時別府より紅丸にて出航、高浜上陸、汽車にて道後著、入湯一泊。二十一日。松山見物（人力車）、三津港より上船、多度津上陸、琴平

行一泊、神社参拜

年ふりし道後だうごのいでゆわが浴あめばまさこの中ゆ湧ゆきくるらしも

おほうみ
大おほうみ洋みをわれ渡らむにこの神を齋いはひてゆかな妻もろともに

三月廿二日。琴平より高松、見物（人力車）、栗林公園、屋島。高松午後四時発、岡山午後七時著、一泊。二十三日。第六高等学校に山宮・志田二教授を訪ひ、医学専門学校に荒木（蒼太郎）教授を訪ふ。市内（人力車）城、後楽園

この園に鶴たづはしづかに遊べればかたはらに灰はい色いろの鶴たづの子こひとつ

時もおかずここに攻め^せけむ古への戦のあと波^{なみ}かがやきぬ

元^{もと}義^{よし}がきほひて歌をよみたりし 岡山^{をかやま}五番町^{ごばんちやう}けふよぎりたり

三月二十三日

岡山を発してゆふぐれ神戸著、中村憲吉君出迎ふ。みつわにて神戸牛肉を食ふ。
香櫨園畔の中村氏方に泊。長女良子さん（五歳）次女厚恵さん（三歳）

ひさびさに君とあひ見てわが病癒えつることをうれしみかはす

何といふ平^{やすらぎ}安^{あした}なるか朝よりわがまへに友のをさなご二たり

三月廿四日。大阪。大学法医学教室（中田篤郎氏）、精神病学教室（小関光尚氏）、浪速花屋碑、心齋橋通、道頓堀（文楽人形芝居）、よる森園天涙、花田大五郎、加納曉氏等も加はり晚餐。中村氏宅泊。

三月廿五日より廿七日。中村君の案内にて奈良を見る。法隆寺佐伯管長にも会ふ。雨降る。ついで大和に行き万葉の歌に関する古跡をめぐる。ゆふ京都著。藤岡旅館に入る。

三月廿八日。宇治、鳳凰堂、平等院、宇治川花屋敷、佐久間象山遭難地、加茂川、本能寺、御所、烏丸通、堀川、嵐山電車、仁和寺の山、塔、如意輪観音、大竹林、隠窟、臨濟宗大本山天龍寺、保津川、桂川、金閣寺（鹿苑院）、大極殿（平安神宮）。藤岡旅館

いそがしき君はひねもすわがために古山川をみちびきやまず
ふるやまかは

あはれあはれ恋ふる心に沁しみみとほり山川やまかはぞ見し君がなさけに

三月二十九日

午前十時四十分京都を発ち、米原駅下車、番場蓮華寺に
石川隆道、樋口宗太郎二氏に会ふ

ぬばたまの夜よるさりくれば湯豆腐ゆどうふをかたみに食へとのたまひにけり

夜よもすがら底びえしつつありたるが曉庭あかつきはに薄氷うすらひが見ゆ

この寺にに 応和りゆうおうをしやう尚しやうよろこびて焦こがしたる湯葉ゆばをわれに食はしむ

三月三十日。米原発急行にて上京す。車中、榊、和田、小野寺の三教授にあふ。教授等は学会出席のために上京するなり。

四月一日。日本神経学会に出席し、呉秀三先生の大学教授莅職二十五年祝賀会（上野精養軒）に出席しぬ

賀歌

芳溪呉秀三先生大学教授莅職二十五年賀歌竝正抒心緒譔（仏足石歌体）二十五章

長崎の港をよろふ山並やまなみに来むかふ春の光さしたりあまつ光ひかりは

長崎にわれ明暮れてとりがなくあづまの国の君をしぬびつしぬびけるかな

み冬つき来むかふ春にこころこそゆらぎてやまね導きたまふ情しぬびて

しらぬひ筑紫のはてにわれ居れどをしへの親を讃へざらめや仰がざらめや

薬師はさはにをれどもあれの師はおほかたに似ず現し世のため今の世のため

さちはひに充ち満ちにつつあれの師の君が力はいや新しもきみがいのちは

ものぐるひは哀しきかなとおもふときさびしきこころ君にこそ寄れ救ひたまはな

しきしまのやまとにしてはわが君や師のきみなれや Pinel 《ピネル》 Conolly 《コノリ》
は外くににして

靈れい枢すうに狂きやうといふともわがどちは狂きやうとな云いひそと宣のらしけるらし病いむひとのため

二十年はたとせにあまる五いつとせになるといふみ祝ほぎのにはに差させる光うづや瑞うづのみひかり

ものぐるひをまもりたまひて年としを經へし君きみがみ髭ひげはつひに白しろしもその清すがしさや

しろがねの髭ひげさへひかり新にひさち幸さいもいよよ重かさねむ君きみがいのちやおのづからなる

ものぐるひは悲かなしきものぞ護まもらせる君きみこそたふとあはれ尊たふときけふの尊たふとさや

うからやから弥いよよ々よさかゆる君きみゆゑに新にひさち幸さいもかぎり知しらえず祝いははざらめや

長崎ながさきに来てより三さんとせは過あまぎにけりいざ歸かへりなむあづまの春はるへ君きみがみもとへ

なまけつつ十年ととせを経たりおこたりて十歳ととせ過ぎけむことをしおもふ君を祝ほぎつつ

中ちゆう学がくの四級しきふせい生せいにてありけむか精神せいしん啓けい微いびをわれは買をひにき小川をがはまちにて

もろもろのくるへる人のあはれなるすがたを見つつ君をおもはむ敬うやまひまつり

わがもてるものは貧まづしとおもへども狂きやう人じん守もりてこの世へは経へなむありのまにまに

をしへを受けしもろもろの人あつまりて教への親を囲むけふかも言ことほ寿ほぎにつつ

うつしみの狂くるへるひとの哀かなしさをかへりみもせぬ世の人醒さめよもろびと覚さめよ

君がこころひろく寛ゆたけくたまかづら絶たゆることなく幸さいちはへてあらむ若わかえつつあらむ

おなじ世にうまれあひたる嬉うれしきや教へのおやにこの敬うやまひをささげまつらむ

むらぎものこころ傾けことほぎの吉言よことまうさむ酒さかほぎ祝いわもせよ豊酒清酒とよききよきに

あまつ日の光るがごとく月つくよみ読の照らすがごとく常幸福とこさいはひにいます君かも

帰京

大正六年十二月長崎に赴任してより満三年三月余、足掛五年になりて大正十年三月
 帰京しぬ

東京に帰りきたりて人ごろしの新聞記事しんぶんきじこそかなしかりけれ

聞けいちゆう中の秘語ひごを心平たひらかに聞くごとし町の夜なかに蛙鳴かはづきたり

長崎よりかへりてみれば銀座十字つむじに牛は通らずなりにけるかも

さみだれの日けならば降れば市いちに住む我が腎じんははや衰へにけり

流行の心理は模倣憑依もほうひよういの概念がいねんを以て律りつすべからず夏の都会とくわいに

ゆたかなる春日はるびかがよふ狂院きやうあんに葦原金次郎あしはらぎんじらうつひに老いたり

さみだれはしぶきて降り殺さつじん人の心きざさむ人をぞおもふ

わが心いまだ落ちるぬにけれなるの胡頹子ぐみを商あきなふ夏あきさにけり

われ銀座ぎんざをもとほり居りてブルドック連れし女をんなにとほりすがへり

長崎の昼しづかなる唐寺たうでらやおもひいづれば白しろきさるすべりのはな

朝はやき日ひびや比谷そのの園むくに腫むくみたる足をぞ撫さする労働はたらきひとひとり

馬に乗りて行く人のあり日ひがへりに玉川たまがわあたり迄行くにやあらむ

浅草あさくさの八木節やぎぶしさへや悲しくて都みやこに百日ももかあけくれにけり

ものぐるひを看護かんごして面おもはればれとしてゐる女をんなと相見あひまつるかも

長崎にて暮らししひまに虫むしばみし金槐集きんわいしゅうをあはれみにけり

さ庭にわべにトマトを植かゑて幽かすかなる花咲きたるをよろこぶ吾われは

けふもまた何か気がかりになる事ことあり虫むしばみし書ふみいぢり居れども

このごろ又^{ぐわいこくじん}外国人を殺しし^{どろぼう}盗人あり我^{わがこころ}心あやしきを君はとがむな
豊のしたにナフタリンなど^ま撒きて蚤おそれる吾をしぬばね

雑吟

東京アララギ歌会

心いらだたく風吹きし日は過ぎてかへるで赤く萌えいでにけり

墓前

亀戸の普門院なる御墓^{みはか}べに水青き溝いまだのこれり

山形より

月読つきよみの山はなつかし斑はだら雪照れる春日に解けがてなくに

五月九日

ふきいづる木々きぎの芽いまだ調ととのはぬみちのく山に水のみにけり

谿ふかくしろきは吾妻山あづまやまなみの雪解ゆきげのみづのたぎつなるらし

みちのくは春まだ寒し遠とほじろくはざまをいづる川のさびしさ

ふるさと

かなしきいろの紅くれなゐや春ふけて白頭翁おきなぐささける野のべを来にけり

われひとりと思ふ心おもに居りにけりをさなき蚕かふこすでにねむりつ

五月十二日

結城哀草果を率て林間の野を行く

山がひに日に照らされし田の水やものの命いのちの幽かすかなりけり

みちのくのわが故里ふるさとに帰り来て白頭翁おきなぐさを掘る春の山べに

山陰やまかげのしづかなる野に二人ふたりゐて細く萌えたる蕨をぞ摘む

みちのくの春の光はすがしくてこの山かげにみづの音おとする

山かげを吾等こ来しかば浅水あさみづに蛭ひるのおよぐこそ寂さびしかりけれ

木立こだちよりかこまれてゐる春のをの小野 昆こんちゆう 虫は跳ぬるだにこの平安やすらぎよ

六月十六日 女等の飼へる蚕

かりそめとおもふは寂さびし飼かひし蚕こは黄きいろき繭まゆにこもりはてたり

七月六日

胃腸病院に神保孝太郎博士を訪ひ、ついで入澤達吉博士の診察を受く

われひとり物おもふ室へやにきこえくる鈍にぶくおもおもしき衢ちまたのおとは
けふ一日ひとひたえまなく汗が流れしと記しるしおかむわが病やまひのことも

山水人間虫魚

一夜

甲斐かひがねを汽車は走れり時のまにしらじらと川原かはらの見えし寂さびしさ
しづかなる川原かはらをもちてながれたる狭間はざまの川かはをたまゆらに見し
山がひにをりをりしらく激たぎちつつ寂さびしき川がながれけるかな

ふく風はすでにつめたし八ヶ嶽やっ たけのとほき裾野すそのに汽車かかりけり

天づたふ日のかたむける信濃路しなのぢや山の高原たかはらに小鴉こがらす啼けり

高原たかはらに足をとどめてまもらむか飛驒ひだのさかひの雲ひそむ山

澄みはてていろふかき空に相寄あひよれる富士見高原ふじみたかはらゆふぐれにけり

あかときはいまだ暗きに目ざめる吾にひびきて啼く鳥のこゑ

蚊帳かやつりてひとりねむりしあかときの冷つめたきみづは齒に沁みにけり

みすずかる信濃高原たかはらの朝めざめ口くちそそぐ水に落葉しづめり

林間

山ふかき林のなかのしづけさに鳥に追はれて落つる蝉あり

桔梗きぢかうのむらさきの色ふかくして富士見が原に吾は来にけり

松かぜのおともこそすれ松かぜは遠くかすかになり_にけるかも

谷ぞこはひえびえとして木下こしたやみわが口笛くちぶえのこだまするなり

あまつ日は松の木原きはらのひまもりてつひに寂さびしき蘚苔こけを照せり

灯下（一）

ともし火のもとにさびしくわれ居りて腫むくみたる足のばしけるかな

ひとを愛かなしとおもふ心のきはまりて吾ことに言ことつげし友をぞおもふ

諏訪すはのみづうみの泥どろふかく住みしとふ蜆しじみを食くひぬ友がなさけに

みすずかる信濃の国に足たゆく灯ともしびのもとに糠ぬかを煮にけり

高はらのしづかに暮るるよひごとにともしびに来てすが継つる虫あり

灯下（二）

窓まど外のは月のひかりに照されぬともし火を消しいぎひとり寝む

しづかなる山の高原とおもへども電流に触れてひとは死にけり

月の光いまだてらさず白しらくも雲は谷べにふかく沈みたるらし

潮浴しほあみに安房あはの海うみへに行きたりしわがをさなごは眠りけむかも

夕飯ゆふいひをはやくしまひてこのよひは妻をおもへり何か知らねど

諏訪すはのうみの田螺たにしを食へばみちのくに稚をさなかりし日おもほゆるかも

よひとおもふにはや更やまがけそめし山家やまがなるこのともしびに死ぬる虫あり

うつしみは現うつしみ身ゆゑなげに嘆かむに山がはのおともあはれなるかも

文身ほりものだらけの屍隅かばね田川たがはに浮きしとふ記事きじも身に沁む山の夜ふけに

やまふかきその谷川たにがはに住むといふやまめ岩魚いはなを人はとり食はむ

八ヶ嶽の裾野のなびきはるかにて鴉かくろふ白樺の森

高原

蓼たてしな科はかなしき山とおもひつつ松まつはら原なかに入りて来にけり

いまだ鳴きがてぬこほろぎ土のへにいでて遊べり黒きこほろぎ

秋づくといまだいはぬに生あれいでて我が足もとに逃ぐるこほろぎ

秋らしき夜よぞら空とおもふ目のまへを光はなちて行く螢あり

谷川たにがはのほとりに見ゆるふる道はたえだえにして山に入るなり

月夜

高^{たかはら}原の月のひかりは隈^{くま}なくて落葉がくれの水のおとすも

ながらふる月のひかりに照らされしわが足もとの秋ぐさのはな

月あかし谷ぞこふかくこもり鳴る釜^{かま}無^{なし}川^{がは}のおとのさびしさ

秋の夜のくまなき月に似たれどもこほろぎ鳴かぬ茅^{ちふ}生のつゆ原

飛^ひ驒^だの空^{ゆふべ}に夕の光のこれるはあけぼのの如くしづかなるいろ

飛^ひ驒^だの空^{そら}にあまつ日おちて夕^{ゆふばえ}映のしづかなるいろを月てらすなり

空すみて照りとほりたる月の夜に底ごもり鳴る山がはのおと

わがいのちをくやしむとは思はねど月の光は身にしみにけり

あちらぎの実

あちらぎのくれなるの実を食むときはちは恋し信濃路にして

ゆふぐれの日^に照らされし早稲^の香^をなつかしみつつくだる山路

八千ぐさは朝よひに咲きそめにけり桔梗の花われもかうのはな

やまめの子あはれみにつつゆふぐれて釜無川をわたりけるかな

山のべにほひし葛^の房^花は藤なみよりもあはれなりけり

くたびれて吾^の息^{づく}釜無^の谷^のくらがりに啼くほととぎす

釜無

夕まぐれ南みなみだに 谿たに よりにごりくる谿たにがはの香かをなつかしみつも

小吟随時

左千夫先生九回忌 七月十日於亀戸普門院

逝きましてはや九このとせ年このとせになるといふ御寺みでらの池に蓮咲かんとす

諏訪アララギ会 八月二十二日於上諏訪地藏寺

八千ぐさの朝あさな夕ゆふなに咲きにほふ富士見が原に吾は来にけり

諏訪アララギ会 九月三日於温泉寺

日の御子^{みこ}むかふる足る日と信濃なる富士見の里にわれはめざめぬ

斎藤茂吉渡欧送別歌会 十月九日日限地藏

わが心かたじけなさに充ちにけり雨さむきけふをあへる友はや

洋行漫吟

大正十年十月二十六日東京駅発、二十七日熱田丸横浜出帆、諸先輩諸友の見送を忝うせり。二十八日神戸着、上陸諸友に会ふ。京都に遊び藤岡旅館泊、中村憲吉君宅一泊。六甲苦楽園六甲ホテル一泊。十一月一日神戸出帆

十一月二日 門司著、上陸、巖流島、下関万歳楼、山陽ホテルに泊る

しづかにいにしへ人をしたふ心もて冬の港を渡りけるかな

(巖流島三首)

わが心いたく悲しみこの島に命おとしし人をしぞおもふ

はるかなる旅路たびぢのひまのひと時をここの小島をしまにおりたちけり

十一月三日。午前十二時門司出帆、藤井公平、奈良秀治、山口八九子三氏見送る。玄海浪高く、四十八分時計をおくれしむ。大方の船客船に酔ふ。

十一月五日上海 福民病院長頓宮博士を訪ふ

海うみの面おもしづかになれる朝あけあけて四し十八じふはち分の時ときおくれしむ

あかあかと濁にごれる海うみと黯かぐろ湛たんくも澄すみみたる海うみと境さかひをぞする

戎じやんく克くの帆ほ緒あかき色いろしてたかだかとゆく揚やう子すかう江えの川かは口ぐちわたる

上しやん海はいのもろもろの様さま相さ人の世よのなりのままなるものところそ思おもへ

「日本首相原敬被刺」と報しやんじたる上はい海しん新聞ぶんの切きりぬき抜ぬきしまふ (六日)

十一月香港

清麗せいれいとも謂いふべき小せう都と市しにつらなりし山やまのかなたの支しな那な国こくの見みゆ

たちまちに山^{さん}上^{じやう}にのぼり見おろせる市街^{しがい}冬がれのさまにはあらず

no smoking に不^ふ准^{じゆん}食^{しょく}煙^{えん}と注^{しゆ}せりき「食^{しょく}煙^{えん}」の文字善しと思はずや

茶^{ちやく}館^{わん}には「清^{せい}潤^{じゆん}甜^{てん}茶^{ちやく}」の扁^{へん}がありにほへる処^{をとめ}女^{によ}近^きづき来^{きた}る

海^{かい}岸^{がん}はさびしき椰^{やし}子の林^{りん}より潮^{うしほ}のおとの合^あふがに聞^きこゆ

十一月十五日新嘉坡

空^{あか}ひくく南^{みな}十^{じふ}字^じ星^{せい}を見るまでに吾^{われ}等^らをりけるわたつみのうへ

日^に本^{ほん}国^{こく}の森^{もり}に似^にしかなと近^きづくに椰^{やし}子^しくろぐろとつづきて居^いたり

腰^{こし}まきを腰^{こし}に巻^まきつつとほるもの男^{をとこ}女^{をみな}とまだ雅^{をさな}きと

汗じめるわが帳ちやうめん面の片隅かたすみにブルンボアンとするしとどむる

ジヨホールの宮きゆうでん殿のまへに佇みしわれ等同胞はらからとたり十人あまりは

椰子やししげる中に群れるし水牛すゐぎうがうごくとき人をおそれしめつつ

岬みさきなるタンジョンカトン訪ひしかばスラヤの落葉こほろぎ蟋蟀せせりのこゑ

太陽たいやうをマタハリといひて礼拝らいはいすまた「感天かんでんたいてい大帝」の文字もじ

牛車うしぐるまゆるく行きつつ南なる国のみどりに日は落ちむとす

「にほんじんはかの入口いりぐち」の標しるしあり遊子いうしじゆ樹といふ樹さへ悲しも

火葬場にマングローヴ樹植ゑたりき其処の灰を手にくくひても見つ

二葉亭四迷も此処に火葬せらる

日本人墓地の中にてはるかなる旅をし行かむこころ和ぎ居り

赤き道椰子の林に入りにけり新嘉坡のこほろぎのこゑ

はるばると船わたり来てかなしきはジャランプサルの夜のとよめき

十一月十八日マラツカ

マラツカの山本に霞たなびけりあたたかき国の霞かなしも

平なる陸にかたまり青きをば柳の木かとおもひつつ居る

東印度会社とういんどくわいしゃのしるし今遣り過去のこのほひを放ちてきたる

戦死者の記念塔きねんたふのまへにセナ樹じゆうゑ往くも還るも見む人のため

日本人にほんじんの齒科医にあひぬささやかに紙障子かみしやうじなどたてて居たりき

今しがた牛鬪たたかひてその一つ角折れたるが途みちのうへに立つ

ふさふさにバナナ成り居るをまのあたり見てゐる吾等馴れむとすらし

マラツカの街がいじやう上うへにしてわれも見つ富とめる女の面をみなおもの愛はしきを

聖せい Francis 《フランシス》 Xavier 《ザビエー》の墓時ときふりて此処ここにしづまる雪降らぬくに

マラツカをはなれ来りて入つ日の雲のながきにはふ紅あけのいろ

額ひたひより汗いでながら支那人墓地馬来人墓地めぐりて来たり

十一月十九日ペナン

ややにしてペナンは近しそのはての空に白き雨ふるが見えつつ

その角つを色うつくしく塗れる牛幾つも通るペナンに來れば

蛇おほく住める寺あり額がくの文字「恩沾無涯おんてんむがい」は国境くわんかひせず

ペナン川に添さかひて遡かのほるところには水田すゐでんありて日本にほんしのばゆ

支那街しなまちはここにも伸びておのづから富とみみたるものも代よをしかさねつ

夜に入りて大雨おほあめとなり乗りこめるデッキ航者かうしや (deckpassenger) の床さへ濡れぬ

十一月二十四日セイロン・コロombo

水の中に水牛すゐぎうの群れるさまはなよなよとせるものにしあらず

おほどかに水張りて光てりかへし田植たうゑは今にはじまるらむか

この村に鍛冶かぢが鋼鉄かうてつを鍛へ居り鎚つちのひびきも日本にほんに似たり

Kandy 《キャンデー》にゆく途中にて土民どみん等が象に命令するこゑ聞きつ

高々と聳えてゐたる山ひとつマハベリガンガと云ふにやあらむ

ことわりはおのづからにて錫蘭せいろんのサカブタの山に滝かかりけり

コロンボのちまたの上に童子どうし等が独楽こまをまはせり遊び樂しも

ここにしも植物園のもろ木々が油ぎりたる葉を誇らむか

仏牙寺ぶつがじにまうできたりて菩提樹ぼだいじゆの種子しゆし日本にも渡れるをおもふ

おほきなる白けだものき獸けだものちひさなる獸けだものを食ふところを彫りぬ

椰子の葉をかざしつつ来る男子をのこらの黄なるころもは皆ぶつし仏子にて

つづき居る椰子やしの木立こだちのひまもりて入日いりひの雲のくれなる見えつ

冬さむき国いでて遠くわたりけりセイロンの島に蜚を見れば

十一月二十六日印度洋

余よ光くわうさへなくなりゆきし渡わた津つ海みにミニコイ嶋の灯台の見ゆ

あらはれし二つの虹にじのほへるにひとつはおぼろひとつ清さやけく

印いん度どの洋うみけふもわたりて食しよく卓たくに薯とろ蕷ろ汁じゆの飯いひを人々たのしむ

わたつみの空そらはとほけどかたまれる雲くもの中なかより雷らい鳴りきこゆ

虹にじふたつ空そらにたちけるそのひとつ直すぐ眼めのまへにあるにあらずや

十二月一日アデン湾、三日紅海

アデン湾にのぞむ山々ひら展ひらくれど青きいろ見ゆる山一つなし

佐渡丸さどまるととほり過がへり海わたる汽笛きてきかたみに高きひととき

朝あけて遠く目に入る鋭とき山やまをアフリカなりといふ声ぞする

空のはてながき余よくわう光くわうをたもちつつ今日けふよりは日ひがアフリカに落つ

夜よる八時バベルマンデブの海峡かいけふを過ぎにけるかも星かがやきて

ペリム島たうアラビア亜刺比亞の国に近くしてその灯台の見えはじめたり

アフリカに日の入るときに前山さぎやまは黒くなりつつ雲の中の日

あかつきは海のおもてに棚たなびける黄くわうしよく色しよくの靄もやあな美うつくしも

紅海こうかいに入りたる船はのぼる陽ひを右にふりさけ見れども飽かず

甚だしく紅あかかりし雲あせゆきて黙もくし示のごとき三つ星の見ゆ

紅海こうかいの船の上より見えてゐるカソリン山さんは寂さびしかりけり

海風うみかぜは北より吹きてはや寒しシナイの山に陽ひは照りながら

十二月七日エヂプト

Suez より [Genefe] , Fayed, Neftsha, Esmailia, Abou-hammad, Zagazig, Benha 等の駅を經て Cairo 著。ピラミッド、スフィンクス等よりカイロ市街を觀、Port Said に至る。同行神尾、藥師寺、庄司三氏のみ

大きなる砂漠のうへに軍隊ぐんたいのテントならびて飛行機飛べり

丘陵きゅうりょうのうへに白雲の棚びけるところもありぬすすしくなりて

砂原すなはらのうへに白しろ々と穂ほにづるはしろがね薄すすぎといふにし似たり

列れつなしてゆく駱駝らくだ等のおこなひをエヂプトに来て見らくし好しも

Bitterlake 《ビタレーキ》といふ湖水みづうみが見ゆ小鴉こがらすのむれ飛びをるは何するらむか

土の家部落つちいへをなして女をんななど折々をりをりいでて此方見こなたにけり

英吉利えぎりすの兵營へいえいなるかかたはらに軍馬ぐんばの調練てうれんせるところあり

モハメツドの僧侶そうりよひとりが路ろじやう上じやうにてただに太陽たいやうの礼拝れいはいをする

たかり来る蠅あやしまむ暇なく小さき町に汽車を乗換ふ

白き鷺畑のなかに降りて居り玉蜀黍の列ながくつづく見ゆ

しづかなる午後の砂漠にたち見えし三角の塔あはれ色なし

ピラミッドの内部に入りて外光をのぞきて見たりかはるがはるに

スフィンクスは大きかりけり古き民これを造りて心なごみきや

はるばると砂に照りくる陽に焼けてニルの大河けふぞわたれる

はるかなる国にしありき埃及のニルの河べに立てるけふかも

ニル河はおほどかにして濁りたり大いなる河いつか忘れむ

朝床に聞こえつつる馬の鈴われの心をよみがへらしむ

黒々としたるモツカを飲みにけり明日よりは寒き海をわたらむ

十二月九日地中海

この夕べ鯛の刺身とナイル河の鰻食はしむ日本の船は

シシリーのイトナのはあまつ日にかがよふまでに雪ふりにけり

伊太利亞の Reggio 《レツジヨ》の町を見つつ過ぐしらじらとせる川原もありて

Messina 《メツシナ》の海峡わたり冬枯のさびたる山が目にし入り来も

孤独こどくなるストロンボリーのいただきに煙けむりたつ見ゆ親したしくもあるか

Bank 《バルク》といふ二みは檣しらせん船せんも見えそめてコルシカ島たうに近づきゆかむ

十二月十四日マルセーユ

朝あささむきマルセーユにて白き霜ブリキ鋳力りきのうへに見えつつあはれ

山のうへのみ寺てらに來り見さくるや勝かち鬨とぎあぐる時にし似たり

十二月十五日巴里

十二月十五日午後十時十分巴里ガル・ド・リオン著。オテル・アンテルナシヨ

ナール投宿。銀行、大使館、市街、トロカデロ、エツフェル塔、エトワール、ルウヴル、パンテオン、アンヴァリード、リユクサンブール、クルニエ博物館、オペラ、地下鉄道（メトロ）等。十八日まで滞在す

霧くらく罩めて晴れざる巴里にて豊なるものを日々に求めき

ルウヴルの中にはひりて魂もいたきばかりに去りあへぬかも

英雄はその光をも永久にして放たむものぞ疑ふなゆめ

[Ici repose un soldat français mort pour la patrie] 1914-1918むれもぬかづく

十二月二十日伯林

十二月十九日、午前八時十分、ガル・ド・ノールを出発して伯林に向ふ。小池・神尾二君と予と同車なり。十二月二十日伯林アンハルターバンホーフ著。石原房雄君出迎^ぶ。Hotel Alemannia 投宿。

○爾来前田茂三郎君はじめ多くの同胞に会ふ。○十二月二十七日、ハンブルグに行き老川茂信氏に会ふ。帰途の汽車中にて信用状の盗難に遭ひ困難したるが、信用状大使館に届き、謝礼三五〇〇麻克にて結末を告ぐ。

○三十一日、ユニオン・バレエにて除夜を過ごし、十二時に大正十一年の新年を祝ふ。○四日より連日美術館を見る。○八日、神尾君ウユルツブルヒに立つ。○十三日、喫太利、維也納に向ふ。

大きな都^{とくわい}会のなかにたどりつきわれ平凡^{へいほん}に盗難^{たうなん}にあふ

美術館^{ムゼウム}に入りて佇む時にのみおのれ一人^{ひとり}の心^{こころ}となりつ

おどおどと 伯^{ベル}林^{リン}の中^{なか}に居りし日の安^{やす}らぎて 維^{ウイ}也^ン納^ナに旅立たむとす

「つゆじも」後記

○

歌集「つゆじも」は制作年代よりいへば、自分の第三歌集に当り、歌集「あらたま」に次ぐものである。そして、大正六年十二月、自分が長崎医学専門学校教授になって赴任した時から、大正十年三月長崎を去るまでのあひだに、折に触れて作つた歌、それから、東京に帰つて来て、その年の十月すゑ、欧羅巴留学の途に上るまでのあひだに作つた歌（その中には信濃富士見で静養した時の歌をも含んである）、それから、船に乗つてマルセーユまで行き、汽車で巴里を経て伯林に著き、暫時其処に滞在し、大正十一年一月十三日、維也納に向つた時までの歌をひろひ集めたことになつて居る。

○

自分の長崎時代の歌、即ち大体大正七年八年九年の歌は、アララギ、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、長崎日日新聞、雑誌紅毛船、雑誌アコウ等にたまたま載つたもの以外は、未定稿のものをも交へて手帳に控へ、一部は歌稿として整理してあつたものが、大正十三年

の火難に際して焼失してしまつた。そこでもはや奈何とも為ることが出来ないから、既に発表したもののみにとどめて編輯しようとおもひ、大正十五年ごろその一部を印刷にまで附したのであつた。然るに計らずも、欧羅巴から持帰つた荷物の中に、長崎時代の小帳面四冊あることを発見したが、その中には大正九年病のため静養してゐた頃の歌がいろいろ書いてあつた。即ち、自分が大正十年の夏ごろ解放といふ雑誌に発表した「温泉嶽」と題した十数首の歌は、皆この小帳面の中にあることを発見したのである。さうして見ると、是等の小帳面は自分が洋行するとき、荷物の中にほかの物と一しよに入れたのであつた。帳面には、長崎から鹿児島宮崎の方に旅したときの未定稿のもの、それから長崎を去つて上京するまでの途中の歌をも若干首書き記してある。是等は皆粗末な歌であるが、自分としては記念したいものであつた。ただ大正七年八年ごろの小帳面が失せたからその年に作つた歌が無い。大正七年夏には、二三の同僚と共に宇佐から耶馬溪、それから山越をして日田に出て、日田から舟で筑後川をくだり、鮎の大きいのを食ひ、その耶馬溪から日田への途上、夜の山越をしたとき、紅い山火事を見たりして、その時の歌もあつたのに、それ等は焼失したのであつた。また大正八年には同僚知人と共に熊本に遊びそれから阿蘇山にのぼり、別府へ抜ける旅をし、阿蘇の中腹で撮つた写真も遺つて居るし、その時の歌も若

干首あつた筈だが、それ等は焼けたから奈何ともすることが出来ない。

○

焼失せた其等の歌のごときは、所詮粗末なものであるから、大観すれば決して惜しむには足らぬけれども、焼失して見れば、つまらぬものにも愛惜をおぼゆるは人の常情であらうから、この歌集には随分つまらぬ歌まで収録せられたのである。また洋行の歌であるが、洋行は自分のはじめての経験であり、慌しい作のうちから、辛うじてこれだけ整理したのであつた。海上の赤い雲の歌などが幾首も出て来るが、これも初航海の経験者として免れがたいことであつた。

○

私が帰朝して、火事のために、雑誌書籍を焼失してしまつたとき、同情深き諸友は、私のために、所蔵の新聞雑誌の切抜を贈られたのであつた。その諸友は、渡辺庫輔（与茂平）、村田利明、鶴木保、鹿兒島寿蔵、竹内治三郎、森路平（高谷寛）、赤星信一、村田敏夫、山根浩、加納美代、佐藤峰人、遠藤勝、畠山元三郎、結城健三、三田滯人、志村治之助、我謝秀昌の諸氏で、この集を編むことの出来たのも、皆此諸氏のためものである。特に、私ごとき者の書いたものを、斯く丁寧に保存して置かれたといふことに對し、私は

涙の出るほどふかく感動したのであつた。この感動と感謝とは、既に十数年を経過した今日といへども毫も変るところがない。

○

集の名「つゆじも」といふのは、この一巻の内容が主として長崎晩期の心にかよふと思ひ、かく命名したのであつた。併し、万葉に、露霜乃消去之如久。ツユジモノケヌルガゴトク 露霜之過麻之爾家礼などツユジモノスキマシニケレの如く、無常悲哀を暗指するやうだから、歌集の名としてはどうかしらんと云つて呉れた友もゐるが、『露霜乃、消安我身、ツユジモノ 雖老、ケヤスキワガミ 又若反、オイヌトモ 君乎思将待』マタラチカヘリ（万葉卷十二）といふ歌もあるから、大体この名にしておかうと答へたのであつた。また私のこの集を予告したのと前後して、某氏の遺稿に、「つゆじも」といふのが出でて、かたがた自分もどうしようかとおもつたのであるが、やはり最初の心にこだはつてこの名を存するこゝとしたのである。

○

この歌集は昭和十五年の夏に編輯した。自分の歌集は「寒雲」以来新しい方から逆に発行しようと企てたから、本集の発行はいつになるか明瞭ではないが、兎も角、ほかの歌集を整理したついでに整理して置くのである。（以上昭和十五年八月記）

○ 昭和十八年夏、横浜の佐伯藤之助氏が、私が大正七年八月七日長崎で書いた左の短冊を示された。

○ 長崎に来てより百日^も過ぎゆきてあはれと思ふからたちの花

○ ついで昭和十八年十二月六日、長崎の森路 平氏が左のごとくに通信せられた。

大正十年一月二十三日、長崎市酒屋町松楽にて斎藤先生送別小宴を催す。会するもの、斎藤茂吉、広田寒山の両先生、大久保日吐男（仁男）、前田毅、大塚九二生並に高谷寛（森路 平）、斎藤先生に左の即吟あり

うつしみは悲しけれどもおのづから行かなかたみにおもひいでつつ
この家に酒に乱れゑひて人は居りとも我等の心にさやらぬしづけさ
をみな等のさやぎのひまに聞ゆるはあられ降りつつあはれなる音
女等のさやぎのひまに聞ゆるは霰のたまるさ夜の音かな

寺まちの南のやまの黒々とつひに更けつつあられ降る音

○

昭和二十年九月、山形県金瓶在住中、熱海磯八荘なる永見徳太郎（夏汀）氏より来書、米軍の用ゐた原子爆弾の惨害を報ずると共に、大正九年予がのこした次の三首を報じた。

長崎の永見夏汀が愛で持ちし鰐わにの卵をわれは忘れず

南なん京きんの羹あつものを我に食はしめし夏汀が孀つまは美しきかな

しづかなる夏汀が家のこの部屋に我しばしば来しこ百穂ひやくすゐも来しこ

○

大正七年は自分の三十七歳の年に当るから、本集の歌は殆どすべて三十七歳から四十歳に至るあひだに作つたものといふことになる。また、本集の歌数は、本文中に六百九十七首、後記中に九首あるから、合算すれば七百六首といふことになる。（以上昭和二十年九月記）

○

本歌集の発行は岩波茂雄、布川角左衛門、佐藤佐太郎、中山武雄、榎本順行諸氏の厚き御世話になりました。私は三月から病氣になり今なほ臥床中ですが、その間岩波茂

雄氏の急逝にあひ、悲歎限りありません。（昭和二十一年五月廿九日、大石田にて、齋藤茂吉記。）

青空文庫情報

底本：「歌集 つゆじも」短歌新聞社文庫、短歌新聞社

2004（平成16）年7月6日初版発行

2007（平成19）年9月10日再版発行

底本の親本：「歌集 つゆじも」岩波書店

1946（昭和21）年8月30日

※「寛済」と「寛濟」、「ピナテル」と「ピナテール」の混在は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、「齋藤茂吉全集 第一巻」岩波書店の表記にそって、あらためました。

※片仮名の拗音、促音の大書きと小書きの混在は、底本通りです。

入力：光森裕樹

校正：のぶこ

2018年2月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つゆじも

斎藤茂吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>